

優陀那日輝の本迹論について

——近世日蓮宗學における法華教理把握の課題——

渡 邊 宝 陽

一 優陀那日輝（一八〇〇—一八五九）は若年より當時の教團の退廢と宗義學の衰微に憤りをもち、宗の實學の確立につとめた。日輝は日蓮宗學から天台學への傾斜を拂拭し、同時代の文化のレベルである儒學・國學等に比肩できる思想性と實學性をともなつた宗學を形成することによつて、日蓮宗の信仰が理智的な解了にもとづく普遍性に立脚することを要請した。日輝は宗學の核として「觀心證道の實義」を重視し、『一念三千論』『雙照二觀精要篇』『雙照事觀修相篇』『事觀眞實義』『事觀略義』『事理二觀略鈔』『最實事論』などの事觀論についての著述をなした他、義學的な著述としては本尊論、本迹論をとり上げている。

二 日輝の本迹論に關する著述としては『本迹日月燈』『本迹歸宗論』があげられるが、前者は漢文體であつて未完であり、後者はカナまじり文で、兩著の執筆の態度に變化が認められる。兩著の關係はあたかも本尊論に關する『妙宗本尊辨』

（漢文）『妙宗本尊略辯』（カナまじり）の關係に擬せられよう。前者は教理大系の論理的な確立を志向するものであり、後者は啓蒙を第一目的としたように思われる。『本迹日月燈』『本迹歸宗論』執筆の動機は、(1)古來日蓮教團の分派は法華經本門・迹門の二門を一致としてとらえるか、または二門に勝劣を認めるかの本迹問題を理由とするのであるが、兩者の論議（勝劣派は數派あり）が膠着している現状の理論を打破することであり、(2)本迹論は日蓮宗學が本門に立脚し、天台學を超越することを證顯する論であるのに、一致を主張して約宗・約教における天台學との一致を主張し、却つて宗義を失うものや、本門に立脚すれば迹門は不要であるという極端な所論を述べるものもあり、形式的な論議の平行的な主張に終止していることを改めること（充四ノ二）である。このように、經典解釋と宗義との統一的理解が確立される必要から本迹論がとり上げられるのである。そこに、日輝が觀心證道の實義を核

とする宗學のもとに、本覺に立脚しつつ始覺・本覺相即をと
なえ、本迹相俱相成を論じる所以があるのである。

ところで、本迹論はこのほか、どのようにとり上げられて
いるであろうか。『弘經要義』には十科中、大意、破立、悉檀
について第四段において本迹が論じられており、「(本迹)二
門能弘雖レ有ニ傍正^リ、而所弘兩意常相共^ス。……一致之旨有ニ同
歸。不二之稱由ニ共成。勝劣之判、爲レ辯三不同、因果之別、爲
レ顯兩存^ニ、體有ニ自異、故二門常別、唯一妙法、故二門常同、
圓因圓果不レ可ニ偏廢^ス」(充三ノ五)というように本化・迹化の
能弘の導師が異なるのは所弘の法體が異なるからであるが、
一致をいい勝劣をいうのはそれぞれ顯わそうとする内容が異
なるのであつて、その意味で兩者ともに否定できないとして、
「若夫一致勝劣、則兩義並存也^ニ」(充三ノ六)という。そして、
その上で「而勝劣之目、但在ニ能判一途、終非其本意^ニ、……
一致之稱、契ニ教理之歸宗^ニ」(同)と一致論を結論するのであ
る。『一念三千論』においても、大段十科のうち理事につい
で、第六に本迹が論じられている。但し、これは一念三千を考
察する上で論じられているのであるが、その中において本迹
理解が處々に述べられている。例えば、「迹門明ニ衆生能具^ス、
仏、本門明ニ仏能具^{スル}ニ衆生、二門相照、互具義成、況迹門但明^ニ
因果、本門但談^ニ依正、亦是二門各談^ニ一邊、而二義相成、仏
智巧說每如^レ斯耳。」(充三ノ一五〇)と述べている。勿論、本門

を中心とするのだけでも、單に本門のみが分離されている
のでなく、「本迹本は一經文義、必當相成^ス、故本門義顯、迹
門義亦成^ス」(充三ノ一五五)というように、本門と迹門とは相
成するものだといふことが述べられるのである。このような
本迹論が出る所以は、日輝が「本門教約ニ果上事用^ニ談^ス諸法
實相、約^ニ一仏功德顯^ス一切生仏本理、教相外別有ニ一重所顯^ニ
(充三ノ一五九)として本門に更に教相の重、觀心の重を認
め、觀心によつて本門所顯の理を中心とするからであつて、
そこに本迹二門の統一的把握が可能となるわけである。すな
わち、「所謂觀心者、即以^レ本會迹、以^ニ三仏果境智、開^ニ衆生境
智、本迹並存、因果不離妙法蓮華經者也^ニ」(充三ノ一五九)等
によつてそれを知ることができる。しかし、このような論理
の基礎はすでに『綱要正義』に見出すことができるのである。
「今古諸師未^レ尋^ニ二門源底^ニ、故苦諍^ニ教相、本迹二門一因一
果、一本一迹、猶如^ニ三頭身^ニ、豈無^ニ高下淺深^ニ乎。……像薩埵^ニ
所謂再往一致、若但偏解者、猶是教相勝劣、觀心一致、對^ニ治
異見之言耳。克論^ニ彼再往之實義^ニ者、勝劣一致俱常、名爲^ニ
一致者也。」(充三ノ三〇四)というのによれば、日像(一二六
九—一三四二)の本迹論を發展させて、單に教相勝劣を破折
して觀心一致をとるのではなく、教相勝劣を認めた上での觀
心一致として把握されねばならないのである。そこに
日輝が單に一致の傳統を踏襲するのではなく、高所からみて

本迹相成でなければならぬという主張がすでに『綱要正義』からあつたことに注意をひかれる。そこに「方^ハ有^ニ本有勝劣究竟一致也。但勝劣之名從^ニ一致未顯之前、今借^ニ名通^ニ二門双運之義也。若知^ニ三門俱常^ニ者、一家諍論自休。」（充三ノ三〇五）という二門双運の主張の意義が認められるのである。

このように、本迹二門相成の主張は「觀心證道」とからみあつて、すでに『綱要正義』（日輝三十二才の著）以來、瞥見することができるのであつて、そのような根本的な課題が『本迹日月燈』『本迹歸宗論』として著わされたのである。

三 このように、本迹は日蓮宗の觀心を經文、教理に定着する問題意識の上で論じられていたのであるが、『本迹歸宗論』においても、本迹一致・勝劣を止揚する鍵はその根底にある觀心であることが明されている。即ち、『歸宗論』は十科に分段されるのであるが、一に「本勝迹劣法門ノ元由」を述べ二に「本迹二門雙立ノ元意」、三に「本勝迹劣法相分別」を立てるのであつて、二門雙立の上で本勝迹劣を論ずるのであるが、これは從來の一致と勝劣とに各々の論據が分割される感がなくもない。つまり、從來の一致にも勝劣にも各々その成立を容認される理由があり、また否定さるべき要因もあるのであつて、その限りでは、一、三の科段においてはその解決を見たことにはならないのである。然して、今、四、「本迹二門教觀歸宗」において一致、勝劣ともに否定されて、新たな

る觀點よりそれが見られる必要が説かれるのである。即ち、日輝は迹門、本門を切り離して、全く別體としてみる觀方は、教相に執することであり、そのような方法によつては觀心を適格に把握することは困難であるとする。即ち、「本迹二門ハ教法ナリ、未タ觀心ノ重ニ入ラザル時ハ本迹二門二十八品俱ニ小乗教、邪見教、未得道教、覆藏教ナリ」（充四ノ二四）「觀心ニ會歸シテ受持讀誦等セリ、三部十卷俱ニ大乘教、正見教、有得道教、顯實教ナリ」（同二五）の文によつて知るように、觀心の重においてしか、本迹の正浩な把握はもたらされないものであり、それは結局相資という形において統一的に把握されるのである。日輝は迹門、本門の教相は觀心においてはじめて統一されたものとし、三法妙に配當してそれを次のように述べる。

1 「迹門ニハ衆生法ノ妙ヲ顯ス、衆生ノ法ト佛法ト相即互融スルガ故ナリ」（同二四）

2 「本門ニハ十界ノ法ミナ一佛ノ内體ニ歸シテ十方三世ノ依正全ク佛ノ身内ヲ出ズト明ス、是佛法妙也」（同）

3 「衆生ニ於テハ衆生法妙ナリ、佛ニ於テハ佛法妙ナリ、此二ノ妙法行者ニ於テハ俱是自己一念ノ妙法トナル、是ヲ心法妙ト名ク、是時十方三世ノ十界ノ依正全ク己心ノ妙法トナリテ、迹門ノ衆生法ニアラズ、本門ノ佛法妙ニアラズ、唯一ノ心法妙ヲ得テ即時ニ究竟ノ菩提ヲ得テ妙覺ノ佛知見ヲ開ク、是ヲ即身成佛

トモ一生入妙覺トモ名クル也」(同二四)

このように、迹門、本門の精神を統一して、しかも兩者の理論を適格に生かすことのできるものは觀心の重(心法妙)でなければならぬと述べるのである。しからば、そこにいう「觀心」は一體どのように考えられているのであろうか。

觀心とは「觀心證道の大益」(同二五)などというように、教法の重に對して證道の重をいうのであり、具體的には、「宗祖所弘の題目」こそ「觀心の題目」(同二六)であり、「本尊」も「觀心の本尊」(同二六)なのである。勿論、「教門の法體ニ即シテ觀心ノ妙法ト成力故に直ニ一品二半ヲ指テ觀心ノ大教ト名ケテ觀ニ即スルノ教ナレバ觀心ノ大教ナリ」(同二五)と述べるように、證道の重を示す觀心は教門に即して語られるのである。

このように、優陀那日輝は觀心證道の重を教相に即しつつ、教相を超越したもの、宗教の根源的なものとしたのである。従つてこのような觀心を中核とする故に、「コノ妙法ハ全ク觀心ノ大教ニシテ心法妙ナル故ニ、竝テ迹本二門ヲ亡スル非迹非本ノ妙法ナリ、當ニ知ベシ、本迹ノ高下淺深勝劣ハ教相ノ所談ナリ、今觀心ノ妙法ヲ取テ本迹二門俱ニ不用ナリ、何ゾ勞シク勝劣高下ヲ爭ハンヤ」(同二七)と述べるように、觀心を中心として仏教理解を試みているのである。

四 このように觀心を重視する所以は、①五重相對に見られ

るように、内外、大小、權實、本迹、教觀というように次第して、觀心が最も中心に置かれていることから當然ではあるが、②傳統教學においては、本迹に自ら觀心の問題も入れられていたのであつて、このように觀心を本迹を超出した法門として規定したことは重要な點である。③そして、何よりも日輝の基本的な思考方法が、實理を重んじ、教相という形式を排除して、ひたすら實理を證顯し、實修しようとする態度が基本となつてゐることは否めないであらう。このことを日輝は次のように言つてゐる。

我祖ニアラザレバ觀心ノ大教正ク壽量ヨリ起ルコトヲ顯ス人ナシ……佛祖ノ本意ハ但觀心ヲ開示スルニ在ナリ、壽量ノ法門ハ他ノ教理ニ同カラズ、眞ニ觀心ニアラザレバ通ジガタキ希有ノ說相ナリ(同二八)

このような立場に立つ本迹論である以上、その論は極めて融通無礙であり、或は本迹雙立といい、或は本迹俱亡という相矛盾した表現を生ずるのである。けだしその相矛盾した表現も、觀心という最もすぐれた實理の法門を證顯する爲の表現であるからなのである。その點が從來の本迹論と全く異なる所であるといえよう。

即ち、五つの範疇から、本迹雙立、本迹俱亡を次のように述べるのである。

①所依ノ正教ニ約スレバ一向ニ本門ニ依ル(三大祕法是ナリ)

② 所立ノ正行ニ約スレバ本迹俱亡ナリ（事觀ノ妙行是ナリ）

③ 所證ノ妙理ニ約スレバ本迹雙立ス（始覺本覺ニ義常住是ナリ）

④ 所對ノ通機ニ約スレバ本面迹裏ナリ（果法ヲ取テ種益ヲ施ス是ナリ）

⑤ 所用ノ助行ニ約スレバ本正迹傍ナリ（助行ハ迹門ヲ兼、正行ハ專ヲ本門に依カ故ナリ）

學者一偏に凝帶シテ大通ヲ塞グコト勿レ（充四ノ二八）

このように、日輝は本迹の關係を一面的に措定するのでなく、多面的な義を認めた上で、統一的に把握するのである。

即ち、迹門の意は理においては仏凡が融通しているが、事相においては差別していると説き、本門の意は、聖智所見の儘に談じて、一切の諸法は事事物物の當位において圓融無礙であることを説くのであるが、それらの意は決して一面的ではあり得ないのである。そこにおいて日輝は宗教のありようとして、始覺と本覺との両面は相即していなければならないと考えるのであり、結局、それらの本迹は教相の段階であつて、更に一重立入つた觀心によつてのみ、本迹は統一的に理解されるものであることを明すのである。

五 以上要するに、優陀那日輝の本迹論は人間の存在における宗教の役割から反省して、本迹一致、勝劣の立場を一旦離れて、觀心證道の義から統一が圖られねばならないと考えた

のであつて、從來の傳統を一轉させたといひ得るであらう。

1 望月歡厚博士『日蓮教學の研究』本論第十一章「優陀那日輝の宗學」・執行海秀教授『日蓮宗教學史』第四篇第六章「優陀那日輝の充治園教學」

2 拙稿「優陀那日輝の初期の著述について」（印佛研十二ノ二）「優陀那日輝の『宗學』について」（同十三ノ二）

3 執行教授前掲書

4 『充治園全集』（全五卷・付別卷）第四卷に收録

5 『妙宗本尊略辯』卷初に「予先ニ妙宗本尊辯ヲ著ス、然ルニ其文ヤ、寬廣ニシテ義モ亦甚細ナルガ故ニ初學ノ爲ニ不^{ナラ}便、故ニ今重ネテ略辯ヲ撰シ其肝要ヲ顯ス」（充三ノ三七七）とあり、今『本迹歸宗論』卷初に「客アリ問テ曰ク一宗ノ中昔ヨリ兩派相分レテ初心ノ學者甚ダ迷惑アリ、多ハ其歸趣スル所ノ宗旨ヲ不^レ知、請フ略シテ大意ヲ示シ教行ノ要義ヲ知ラシメヨ」（充四ノ一）とあるのは『本迹日月燈』『本迹歸宗論』の關係が『妙宗本尊辯』『同略辯』と同様であることを類推させる。

6 望月博士前掲書本論第八章「本迹論と日蓮宗の分派」淺井要麟氏『日蓮聖人教學の研究』後篇一一「聖祖門下の本迹論」。

また淺井圓道氏「法體勝劣論の考察」同（再）（大崎學報一一・一一五號）は法體勝劣論は可能かの觀點からの考察である。

7 充は『充治園全集』、數字は卷・頁を示す。以下同じ。

8 執行教授前掲書三四一頁

9 本迹相成を「二門相成」「双運」といつているが「相資」は管見では見當らない。